

---

# 仮面ライダーバイア ~ 黄の印 ~

唐揚ちきん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーバイア〜黄の印〜

### 【Nコード】

N2826Y

### 【作者名】

唐揚ちきん

### 【あらすじ】

不本意ながらキュウベえとあだ名を付けられている少年、茅部久平<sup>ひら</sup>。彼が仲の良いクラスメイトの最中モニカに奇妙な夢を見ると相談される。

彼は彼女の悩みを取り除こうと右往左往し、この世の知らなくない『者』を知ってしまう。

彼はソレに立ち向かうことができるのか。

## プロローグ『夢』

唐突で突然だが、俺の名前は茅部久平だ。

「ねえー。キユウベえ、ちゃんと聞いてる?」

もう一度言おう。俺の名前は久平だ。H?・SA・H?・RA、ひさひらだ。

「キユウベえつたらー」

断じて、キユウベえなどというふざけた名前じゃない。

「ねえねえ、キユウベえー」

我慢の限界を超えた俺は、ふざけた名前で呼び続けるそいつを睨む。

「あんな。俺の名前は久平だ。いい加減ちゃんと覚えような」

「えー。キユウベえの方が絶対かわいいよ。そっちのほう呼びやすし」

笑顔でなめたことをほざくこの女の名前は最中モニカ。普通なら校則違反のブロンドヘアをしているが、こいつのこれは地毛なので許されている。

「ほら、私ってアメリカの血が入ってるから」

「明らかに関係ねえだろ、それ。アメリカ人とハーフの人たちに謝れ」

高校一年の時から同じクラスだったのも関わらず、こいつは一向に俺をちゃんと名前前で呼ぼうとしない。喧嘩売ってんのか?

性格がここまでおかしいのに月に三度は告白ラッシュが起きるほど、男子には絶大な人気がある。世の中、所詮見た目しよせんなのだといいことを思い知らせてくれる存在だ。

「そんなことよりも私の話ちゃんと聞いてる？」

人の名前をそんなこと呼ばわりかよ。この女アム。

「聞いてるよ。最近毎日変な夢を見るって話だろ。ただ単にお前がメンヘラだからじゃねえのか？」

こいつの頭の中は、お花畑が永遠に続いてそうだ。

「そんなんじゃないやなくて、もっと深刻なの！」

いきなりモニカの声のトーンが上がる。

いつもとは違うこいつらしくない様子に若干びっくりにした。

教室で話してるので、周囲の目が俺達に集まる。

ただでさえも性格に難があるとはいえ、とびっきりの美少女と会話をしているのだ。当然、男子が俺を見る目はかなり険けわしくなる。

変わってほしいなら、変わってやるから名乗りを上げて出て来いよ。そう思っただけで男子どもに睨そむみ返すと、急に目を背そむけ始める。何なんだ、お前らは。

「ゴメン。いきなり大きな声出しちゃって」

男子どもにガンを飛ばしていた俺は、モニカの謝罪で気を取り直す。

「いや、俺も無神経だった。すまん。それで具体的にはどんな夢なんだ？」

「うん。何かね、すっごく大きな生き物に見られている夢なの」

モニカは深刻そうにぽつりぽつりと断片的に話し出した。

曰く、それは軟体動物のようで、目玉がたくさん付いているそうだ。その目の一つひとつがモニカを凝視しているらしい。そしてその生き物の中心が口のように開いたと思うと、意味不明の言葉をモニカに投げかけてくるらしい。

聞くだけでも、かなりの嫌悪感を感じるのに実際にソレを見たモニカはどれほど辛かったのだろうか。俺は最初に茶化して答えたことを深く後悔した。

大体、俺なんかよりもずっと友達がいるこいつが、わざわざ俺に相談してきたことをもつと考えるべきだった。

「病院とかには行ったのか？」

「うん。でも何も異常はないって。私自身、特に悩みがあるわけでもないし」

そうか。何か力になってやりたいんだが、正直俺には何もすることができない。

「まあ。取り合えず、何かあったら、俺に全部話せ。誰かに話すだけでも少しは気が楽になると思うぞ」

「うん！ありがとう。キュウベエの言うとおり少しだけ心が軽くなったよ」

そう言って、モニカは俺に花のような笑顔を向ける。『俺の名前は久平だ』と口に出かけたが、それでこいつの心が軽くなるなら、まあよしとしとこう。

## プロローグ『夢』（後書き）

稚拙な内容の上、あまり投稿できないかもしれませんが、読んで下されば大変うれしいです。

## プロローグ2 『思い出』

モニカが帰った後、俺は図書室に向かった。

目的は、お呪いまじな関係の本だ。そういう本は大抵、自己暗示をかける程度の気休めでしかないが、少しでもあいつの心が楽になるのなら手を伸ばすに越こしたことはない。

何故俺がモニカのために、わざわざそんなことをするのか。

それはあいつが俺にとって大切な恩人だからだ。

俺の両親はドライな人たちで、俺に関心がほとんどなかった。まあ、それは今もなのだが。

とにかく、最後に会話をしたのもいつか覚えていないほど、冷めた家庭だった。

そういう人間は当然暗くなり、小学校の時にイジメの標的にされた。

ここまではよくある話なのだが、俺は幸か不幸か身体が大きくて腕力も平均より高かった。そんな俺はある時、俺をイジメていた奴らに唐突にキレた。

何がそれほどまでに腹が立ったのかは覚えていないが、俺はそいつらを叩きのめした。イジメグループの奴らも今まで何もやり返さなかった俺が突然逆襲したので対処できなかったのだらう。

具体的にどこまでやったかという歯の八割が折れるまでやった。

リーダー格の奴は失禁するほど苦しんでいたのを今でも覚えている。

そんなことがあり、俺は自分の強さを再確認して不良になった。

小学校、中学校を卒業して、高校に入ってもまだグレていた。

そんなことをしていれば、もちろん不良グループに目をつけられる

ことは当然の帰結だった。

そして忘れることのできない運命の日、6月29日の午後10時40分。

俺は二十人近くの不良どもに闇討ちを受けた。

奴らは、事もあろうに鉄パイプを所持していた。

身体中に重度の打撲を受けながらも、命からがら逃げ切った俺は道端でうつ伏せに倒れ、動けなくなった。

ちょうど梅雨の季節だったせいもあり、大雨まで振ってきた。

もともと人通りの少ない道、深夜も近い時間帯、さらには大雨ときた。誰かが通りかかることはほぼない。仮に通りがかったとしても確実に無視されるだろう。

身体は完全に冷え切り、俺は死を覚悟した。

「あなた大丈夫！？すごい怪我してる、どうしたの！？」

そんな時にあのお人よしな馬鹿な少女、最中モニカに出会った。

いや、出会ったというのは少し御幣ごへいがある。なぜならモニカとは同じクラスだったのでこれが初対面ではないからだ。

「よく見たら同じクラスの人！？何があったの？とにかく、救急車呼ぶね！！」

救急車が来る前も救急車はんそうに搬送されている間も、モニカは俺の手をずっと握っていてくれた。

ただクラスが同じというだけの話したこともない粗暴で嫌われ者の俺を、服が血で汚れることも気にせず優しく、でもしつかりと握っていてくれた。

俺は泣いていた。理由は自分でもわからなかった。ただ何故か涙が



止まらなかった。

入院中の時もモニカは俺に会いに来た。最初は何度も拒絶した。何で自分に優しくしてくれるのか解らなかったからだ。

あの時の俺はモニカが自分の理解の範疇を超えた宇宙人のように思っていた。

それに今まで暴力を振るうばかりでまともにも人と話したことのなかった俺は他人を信用することができなかった。

それでもモニカは俺に話しかけた。

学校であったこと、最近ハマっていること、友達が失恋して暗黒面に墮ちそうになっていること。……最後のは、正直ききたくなかったが。

「久平？ひさひら・ヒサヒラ。呼びにくいね。うん……そうだ！今日からあなたの名前はキュウベえね！」  
ちなみに変なあだ名はこの時付けられたものだ。

俺もだんだんとモニカのあいづちを打つようになって、退院間近にはこちらから話をふるようになっていた。

それから、学校に復帰してからもあいつは俺にお節介を焼いてくれた。最初はクラスメイトに露骨に警戒されが、その内普通に話をするようになった。

モニカのおかげで俺は今ここで生きていける。絶対に口には出さないが俺はあいつに感謝している。

だから、あいつが困っているなら、俺は何があろうと助けたい。

そのために無意味かも知れないが、俺はお呪いの本を本棚から手当たりしだい引っ張り出す。大量の本を机にぶちまけて一冊一冊『嫌

な夢』を見ないお呪いを探す。

少しでもあいつがしてくれたことを返せるように。

ブローグ2『思い出』（後書き）

全然ブローグが終わりません。怪人すらも出ませんチクシヨウ。  
どうしてこうなった。

### プロローグ3 『黄衣の王』

「ん？」

大量のお呪いまじなの本の中から、一冊他とは違う風変わりな本を見つけた。

著者名がどこにも表記されていない。  
黒い八つ折判で表紙に大きな黄色の印が浮き立たせてある。

「題名は『THE KING IN YELLOW』・・・日本語に訳すとえーと・・・黄衣の王、か？」

自身ねえな、英語は特に。中学の時全然勉強しなかったツケが今頃になってやってくる。

取り合えず、俺は本を開いてみる。  
当然ながら、中は英語で溢れていた。

「こんなの読めるわけない・・・・・・・・・・・・・・・・えあ？」

文に目を通した瞬間、ぐにゃっと視界が歪んだ。身体が重力から解放されるような浮遊感。

「何が起きた!？」

顔を横に向けると何かが立っていた。

確かに人型なのにそれは明らかに人ではない形容しがたい気配を醸かもしだしていた。

黄色いボロボロのローブに視界穴のない青白い仮面。

「黄衣の王・・・？」

口に出した俺自身にすら、よく解らない。ただ何故かソレが『黄衣の王』であることが解った。  
今まで味わったことのないほどの恐怖を感じていた。死にそうになった時なんかよりずっと上の『次元の違う恐怖』。

『黄衣の王』は俺に一歩一歩近づく。

座っていたはずの椅子がいつに間にか消えていた。俺は棒のように床と垂直に立っていた。

身体はまったく動かない。

足硬直して動けないとかそういうレベルじゃなく、もともと身体が動くものだということが理解できなくなるくらい俺の身体は微動だにしなかった。

『黄衣の王』は俺の数センチ前で止まった。

これほど近い距離なのに息遣い一つ聞こえない。呼吸という概念などないのだろうか。

「ッ!?」

『黄衣の王』は俺に手を伸ばしてきた。手といっても黄色い衣にすっぽりと包まれているため中身はまったく見えない。

いや、違う。今やっと気付いた。

ずっと黄色いローブだと思っていたこれは、皮膚だ!

ちょうど俺の腰の辺りに『黄衣の王』が触れる。意外にもその手は冷たくも暖かくもなかった。

『黄衣の王』が触れた瞬間、俺の腰の周りに古風な金の眼球のような細工が施された黒い縞のある瑪瑙でできたリングが現れた。

「スミマセーン。もうそろ閉館時間なんで閉めますよー」

気が付くと『黄衣の王』は居らず、俺は椅子にしっかりと座っていた。

机の上には例の黄色い印の浮き出た本もなかった。

「あー。ひよつとして寝てますー？」

恐らくこの図書室の司書だと思われる男が俺に尋ねてきた。

「あつ。すみません」

「学生サンはいろいろ大変ですもんねー。受験とか」

一瞬嫌味に聞こえたが、表情を見る限りそうではないのだろう。俺は気になったことを聞いてみる。

「あーの。『THE KING IN YELLOW』って題名の本ありますか？」

「うーん？ここの司書五年近くやってるけど、そんな本あったかなー。著者名はわかる？」

「書いてなかったと思います」

俺が正直に答えると司書は笑った。

「著者名のないような怪しい本は流石に置いてないよー。そういう本はこっちで処理すると思うし」

「そうですか」

俺は司書にあいさつをすると図書室から出た。

じゃあ、あれはやっぱり夢か何かか。俺もモニカのこと言えないな。ほっとして何気なく腰に触ると、何か無機物のような感触に触れた。

「なッ?!」

急いでワイシャツをめくると一瞬だけベルトのように瑪瑙のリングが腰に巻きついているのが見えた。

だが次の瞬間にはそこには何の変哲もない自分腹が見えただけだった。

あれは夢なんかじゃない。間違いなく俺は『黄衣の王』に何かされたのだ。

### プロローグ3 『黄衣の王』（後書き）

やっとファンタジーっぽいシーンを書けました。  
やっとプロローグが終わりました。

次からは本編に入っていきます。

・・・『次』がいつになるかわかりませんが。



## 第一話『末堂』

「よう。キュウベえ」

後ろから俺は誰かに声をかけられた。だが無視した。

スタスタと別段、足を速めるわけでもなく俺は通学路を歩く。

「いや、ちょっと待てよ。キュウベえ。お前、俺をシカトする気かよ」

何か聞こえたような気がするが黙殺する。

「べえさ〜ん。もしも〜し。聞いてます？」

ああ、今日は家に帰ったら、風呂を沸かしてさっさと寝よう。図書室で恐怖体験したせいで汗っびしよりだ。

「一貫してシカト?!?!」

あまりに耳障りなので、仕方なく俺は後ろから声をかけ続けてくる馬鹿に反応してやることにした。

「俺の名前はキュウベえでも、べえさんでもない。茅部久平かやへひさひらだ！しつかり覚えておくためにメモっとけよ、末堂」

「良かった〜。ずっと無視するモンだから、親友であるキュウベえに嫌われてるのかと思っちまったぜ。一瞬でもお前を疑った俺が馬鹿だった！今ならメロスに、疑った自分を殴ってくれと言ったセリヌンティウスの気持ちがよくわかるぜッ」

モニカに引き続き、俺をキュウベえ呼ばわりする馬鹿の名前は末堂すえどう

ただし  
雅。

残念なことに俺と同じクラスに在籍している。つまりクラスメイトだ。何故か俺の親友を自称している。むしろ自傷する馬鹿。

「殴ってほしいのか？今ならお前の顔面に切れの良いグーを叩き込めると思っぞ」

「ぼ、暴力は良くないよお、キユウちゃん」

俺が指をボキボキ鳴らすと末堂は茶化して焦ったふりをする。食えない奴だ。

「で？何の用だ。言っとくがもし下らない理由だったら、俺はマジでお前をセリヌンティウスにするぞ？」

口ではそう言う物の、訳の解らない非日常を体験した俺は末堂との会話にどこか安堵を覚えていた。

ぐらついていた足場が、ようやく定まってきたようなそんな感覚だ。

「ああー、そうだったそうだった。キユウベえに聞きたいことがあったんだ」

ポンと手を打って、末堂はようやく用件を思いだしたような顔をした。

「聞きたいこと？」

「おう。お前今日、名状しがたい『何か』に会わなかったか？」

「……………は？」

再び、俺の足場が揺れたような錯覚を覚えた。安堵していた分、さ

らに響いた。

????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????  
????????

俺の脳内が疑問符で埋め尽くされる。

どういうことだ？何でこいつがソレを知って……。

「それでさあー、その『何か』に」

やめろ。

やめろ。やめろやめろやめろやめろやめろ。それ以上言わないでくれ。

「これまた何か『変な事』されなかったか？」

俺は末堂を背に向けて、その場から逃げ出した。

怖かった。ひたすら怖かった。この世界が自分の知らないどこかに変わってしまったような、取り返しのつかない感覚を感じていた。

このまま家に帰って布団の中に潜りこんで何もかも忘れてしまいたかった。

そうだ……。これは夢だ。モニカみたいに俺は悪夢を見ているんだ。きつとそうだ。そうに違いない。

目が覚めればきつと……。

「がアツ……!!」

後ろにぐつと引つ張られたかと思うと、背中に激痛が走った。肺から空気が抜ける。

地面に叩きつけられたということを理解するのに十秒近くかかった。

「ここで逃げ出すってことは、黒だと思ってもいいってことか？キ  
ユウベえ」

末堂の軽い声がここまで恐ろしく聞こえたのは初めてだった。

「んじゃ、取り合えず眠っとけ」

何をされたのか分からなかったが、その台詞と共に俺の意識はそこ  
で途絶えた。

## 第一話『末堂』（後書き）

話はそれほど進んでいないように感じますが、ここから話が急展開するのでやはり『第一話』と銘打って起きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2826y/>

---

仮面ライダーバイア～黄の印～

2011年11月17日00時40分発行